

GEKKAN ORIMOTO

月刊 織本

12月号

2008年12月1日 Vol.172

発行 医療法人財団 織本病院

印 刷 〒204-0002 東京都清瀬市旭が丘1-261

TEL 042-491-2121 URL <http://www.orimoto.or.jp/>

発行人 高木由利



寒・春

(2008.1.9)

腎不全を受けとめた人達



理事長 高木 由利

11月の下旬から急に冬の風が吹き始めました。病院の中にもクリスマスの飾りやポインセチアが並び、外の寒さを忘れるほど、心が温かくなります。

* * *

11月11日、当院患者会の発会式が地下の調理実習室で行われました。

この名は“織腎親友会”。織本病院に通院しているしらる慢性腎不全の患者さん達が、食事療法を中心とした患者交流会を作ろうと集まり、でき上がった会なのです。

腎不全食とは高血圧や糖尿病あるいは種々の腎炎により腎臓が破壊され、わずかに残った腎臓の機能を可能な限り、保持するための食事です。

その基本は①低タンパク（標準体重1kgあたり1日0.5g）、②減塩（1日5～6g）、③必要充分なエネルギー（標準体重1kgあたり1日30～35キロカロリー）です。この食事は、私達が何気なく食べている食事とは全く異なるものであり、特にタンパク質は体に良いという既成概念を頭の中から完全に排除しなければ成功しないものなのです。食事の構成は三大栄養素、つまり“タンパク質”“炭水化物”“脂肪”から成

っています。しかし腎臓がこわれると、この三大栄養素の1つであるタンパク質が腎臓に負担をかけ、腎臓の破壊が進みます。従って腎不全食では、どうしてもタンパク質を制限せざるを得ないのです。ところが、世の中のいわゆるおいしいものの中心はタンパク質ですから、それを制限することは即ち、おいしくない食事をすることになるのです。

腎不全食はまずい。これが今までの考え方でした。しかし、タンパク質と塩分を制限しても、おいしくて楽しい食事が作れるのだということを伝えたいために、私も当院の栄養士達も悪戦苦闘してきました。昨年の秋、地下の調理室をリニューアルした時に患者さんのための調理実習室を作り、栄養士達が患者さんに調理指導を始めたのです。これが大きな契機となり、少しずつ患者さん達においしい腎不全食の調理法が広まっていきました。そして念願の患者会の設立に至ったのです。外来の待ち時間中に有志が声をかけ合ったのが8月。そして少しずつ準備が進み、11月11日には8名の役員が決まり、私はおいしくて楽しい試食会にお招きを受けました。栄養士達もそうですが、私は

この“織腎親友会”的発会は涙が出るほどうれしかったのです。何故なら、腎不全の薬物治療はありません。正確な腎不全食を作り、しっかり食べてていくことが治療そのものなのです。そして、腎不全の方々の本当の

主治医は私ではなく患者さん自身だからです。

この小さな活動がどんどん成長し、正しい腎不全食が全国に広まっていくことを私は夢みています。



アーサー・ホーランドさんと出会ったのは数年前のある日曜日。
狭山のお茶畠の中にある小さな教会でアーサーさんがメッセージをされた時でした。
力強く、でも温かいメッセージに魅了され、それ以来お友達になって下さったのです。
著書“不良牧師”も有名ですが、日本全国、またアメリカでも伝道活動に励んで
いらっしゃいます。最近は色々な雑誌のモデルもしているそうです。

理事長 高木由利

精進の風

アーサー・ホーランド 氏



ある日本の動物園では多額な金をかけて、十年計画の改革に取り組んでいる。その理由の一つは動物園の動物が本来の生活形態を無くしてしまっていることにあるそうだ。檻の中に閉じ込められていること事態、動物にとっては自然ではないし、当然、本来の生活形態をなくしてしまうような環境の中にある。それをどう回復させるかは矛盾を感じさせられるテーマもある。

教養の一環として身近に動物の生態を見学できる場所としての動物園のありかたが問われている時代でもあるようだ。檻の中で虎やライオンがストレスを感じながら、行ったり来たりしている姿や、無気力になつて動かずに寢ているゴリラを目にした人たちも少なくないと思う。

アメリカの動物園と比較すれば、まだまだ日本も欧米から学んで動物本来の生体を回復させるための改革が始まりつつある。この出来事を思いながら、ふつと人間も同じではないかと考えさせられてしまった。社会という檻のような中で人間も本来の「らしさ」を失っているように見える。

年間3万人以上の自殺者、その背後には推定十倍の自殺未遂者がいると言われている。また、他殺においても親が子供を、子供が親を殺害するという悲しい報道も少なくない。

地位、名譽そして肩書きに憧れ、損得勘定で人を判断し、勝ち組、負け組という格差を生み出し、人を思いやる「こころ」も失われ、己の欲だけを満たそうとする人間。確かに社会では人間のモラルの秩序を保つためにルールは作られるが、それを守つていけば学識的な人間なのかと言うと、それは疑問だろう。人間が人間らしさを回復するということは人間として育ち、完成に向かうということでもあるように思う。学校だけの教育ではなく「こころ」の修養が求められている時代ではなかろうか。

野鴨の群れが大空を三角形の飛翔を組んで、移住している時、一羽の鴨が大地を見下ろすと面白い現象を見る。農夫に飼われている家鴨が池の上で野鴨の移住する呼び声を聞いた瞬間、家鴨も羽を広げて羽ばたこうとしている。農夫に飼われている家鴨は蚯蚓も小

屋も池も忘れてその一瞬、渡り鳥になるのである。家鴨の中に眠っていた野生の鴨が目覚めさせられるのだ。

われわれ人間も、社会の常識の池の上で飼いならされた家鴨、または檻の中の動物になってはいないだろうか。

“星の王子様”の著者アントワーヌ・サンテグジュ

ペリは著書“人間の土地”の締め括りでこのような詩を残して完結している。「精神の風が粘土の上を吹くとき、はじめて人間は創られる」…確かにものやことには価値がある。しかし人間には尊厳があるということを忘れているわれわれの時代に精神の風に触れられる必要性を感じる。

THE 病理診断

Vol.42

病まなければ

聖マリアンナ医科大学 診断病理学教室教授

高木正之 先生



今年もクリスマスの美しい飾り付けがみられる時期になりました。「クリスマス」とは、キリストの誕生をお祝いするという意味です。彼は約2000年前に馬小屋で生まれ、家畜小屋の飼い葉桶の中に寝かされていたと言われています。なぜ暗くて汚い、糞の臭いがする飼い葉桶だったのでしょうか。彼は人間の罪の身代わりに十字架に架かって死んで、3日後によみがえったと聖書に書かれています。そのような偉大なことを成し遂げた方の人生の出発が、卑しい、惨めなところであったことは不思議です。彼は、人生で悲しいこと、不幸と思われるようなことを経験していくことが必要だったのです。そのような経験はどういう意味があるのでしょうか。それは、悩み苦しんでいる人に同情し共感することができるようになるためでした。

私たちは、どうしたら人に同情したり共感することができるようになるのでしょうか。「病まなければ」という詩を紹介します。

病まなければ捧げ得ない祈りがある
病まなければ信じ得ない奇跡がある
病まなければ聞き得ない御言葉がある
病まなければ近づき得ない聖所がある
病まなければ仰ぎ得ない聖顔がある
おお、病まなければ
私は人間できえもあり得ない

これは詩人で牧師である河野進さんの詩です。病気は嬉しいことではありません。私たちは必ず病気になります。その時「神様、どうしてですか」と祈ることができます。神様の言葉を聞きたいと思います。そして病気の方の気持ちが分かるようになります。

病んだとき、それを自分がどのように受けとめるかが真実の人間となるかどうかの鍵となります。この詩は病気も神様から与えられる一つの恵であることを教えてくれます。

Orimoto Hospital Christmas Concert 2008

【指揮・指導】

声楽家 クロイツァー涼子

【ピアノ】

篠田 昌伸

【バレリーナ】

宮本 舞

【合唱】

織本病院混声合唱団

ボーアズコ一口（男声合唱）

長谷川 充子

真下 孝子

小林 伸子

高橋 典子

2008年12月20日（土）

1:30pm 開場 2:00pm 開演

オリモトホール（織本病院4F）

入場無料



腎疾患ゼミナールよりお知らせ

12月の腎疾患ゼミナールは毎年恒例の『クリスマス特別企画 リストランテ・ユリ』を開催致します。

誠に申し訳ございませんが、この回は現在腎不全の食事療法に励んでおられる保存期腎不全のご招待患者様のみの参加とさせていただきます。

来年1月からは通常の腎疾患ゼミナールに戻りますので、皆様是非ご参加ください。スタッフ一同心よりお待ち致しております。

